

【総括報告2】石垣普請の組織と穴太の役割

木 越 隆 三

調査研究所の木越でございます。今日は1時から非常に内容の濃い話を三つお聞きになって、いささかお疲れかもしれませんが、本日の最後の報告です。もうしばらくお願いしたいと思います。私の話は、大坂城の公儀普請の造営体制について触れたいと思いますが、金沢城の石垣様式の変遷というものを踏まえて、石垣技術の変遷の大きな波動についても話したいと思っています。

さて私どもの金沢城調査研究所が5年前に始めた城郭石垣構築技術の比較研究という総合研究ですが、これは大きく二つのグループに分かれてやってきました。1つは北野さん・滝川さんが紹介しましたような考古学の手法で、現存する石垣遺構そのものを対象に石垣技術を解明しようというグループと、もう1つは絵図文献班という私ども何人かのグループに分かれて研究を進めてきました。絵図あるいは文献を史料として石垣作りの技術や普請の組織、あるいは穴太^{あのう}という石垣職人の役割を解明する、そういうグループの一員として、いろいろな調査に取り組んできました。

文献班は、前田家、加賀藩の穴生^{あのかた}方に所属していた石垣職人の史料に注目し、「穴生方後藤文庫」という200点余りの古文書が金沢市の図書館に残っておりますが、そのうち石垣技術に関する史料を精査し、その現代語訳に取り組むなど、いろいろな形で成果を公表してきました。それだけではなく、全国的に石垣技術史料を発掘しようと全国的に史料調査も行いました。前田家だけではなく広く全国に目を広げました。むろん前田家は全国で一番穴太^{あのかた}の数が多くて、日本を代表する石垣技術者の数を誇っております。しかし、他藩でも穴太^{あのかた}を抱えている藩があります。穴太という文字は前田家や細川家など諸藩では「穴生^{あのかた}」と書きますので、大名家所属の場合は「穴生」と表現し、幕府所属の場合や、一般的な石垣職人の意味で使うときは「穴太^{あのかた}」と書くというような区別を行い、手元のパンフレットや資料などではそういう区別をしています。きちんと区別できていない所もあるかもしれませんが、ご容赦ください。

諸藩の穴生^{あのかた}たちの来歴や職務内容、仕事ぶりを探るということも文献班の課題としてきました。さらに、さきほどから話題になっている天下普請における造営組織、割普請の組織ですね、そういった普請組織の問題や、どういう労働力がそこに投入されているのか、あるいは居城の普請体制はどうだったのか、公儀普請の組織と比較することも課題にして、これまで『金沢城石垣構築技術史料Ⅰ・Ⅱ』ほか「研究紀要」などで、ささやかながら調査成果の一部を公表してきたところであります。

□石垣技術は、なぜ「西高東低」なのか

本題に入ります。1月末に地元新聞のコラム欄のなかで、私はこのシンポジウムの宣伝をかねまして「石垣技術は西高東低」という短い文章を書きました。西高東低というのは西に高気圧、東に低気圧という冬型の気圧配置のことですが、これは漁業技術や船の技術についても、比喩的にこのような言い方をすることがあるのです。西日本が技術的に進んでいて、東日本が遅れている場合ときどきこういう形容を行うことがあります。つまり、西国の石垣技術が進んでいて、東国は遅れているという意味なんですね。多少問題提起的に書いたつもりですが、よく考えると正確ではないのです。しかし、「石垣技術は西高東低」というフレーズは耳障りも良いので、不正確で誤解を招きやすい表現だけど、今日のイベントを印象付けるうえで、多少刺激があったほうがよいかなと思い、やや語弊のある言い方を、あえてしてしまいました。その弁明^{へんめい}というか真意^{まいつい}というのを本日冒頭に詳しく説明したいと思っ

表 1 大坂城再築普請に動員された64大名

助役大名 (五十音順)	居城館	大坂城出役状況	領知高					出身 国名	織豊期から寛永初期までの経歴
				慶長11江戸	駿府城	名古屋	慶長19江戸		
1 秋月種春	日向財部	3回	3万	○種長	○種長			豊前	種実→種長(天正15秀吉に属し財部)→種春
2 有馬康純	日向早延岡	1期・2期直純	5万3000					肥前	晴信→直純(慶長17父配流道領相統、慶長19延岡)→康純(寛永3年相統)
3 有馬豊氏	丹波福知山	3回	20万9000	○	○		○	播磨	永祿12播磨三木生、寛永19没。関ヶ原後丹波福知山へ、元和6年末久留米
4 池田忠雄	備前岡山	3回	31万5000	○忠継			○忠継	尾張	輝政→忠継(2男)慶長8備前拝領→忠雄(3男)元和元年相統
5 池田輝澄	播磨山崎	3回	3万8000					尾張	輝政→輝澄(4男)
6 池田輝興	播磨佐用	3回	2万3000					尾張	輝政→輝興(6男)
7 池田長幸	備中 松山	3回	6万5000	○輝政・○利隆(姫路)	○輝政	○輝政	○利隆(姫路)	尾張	輝政→忠雄(利隆弟)
8 池田政綱	播磨 赤穂	3回	3万5200					尾張	輝政→政綱(5男)
9 池田光政	因幡 鳥取	3回	32万	○長吉	○長吉		○長吉	尾張	輝政→利隆→光政(慶長14岡山生、元和2相統、元和3年鳥取、寛永9年岡山)
10 生駒高俊	讃岐 高松	3回(1期正俊)	17万1800	○一正		○	×	美濃	親正(天正15丸亀6万石)→一正(慶長7高松転封)→正俊(慶長15相統)→高俊(元和7相統)
11 石川忠総	豊後 日田	3回	6万					三河	徳川家譜代、慶長14祖父家成の遺領つぎ大垣へ。元和2豊後へ転封
12 市橋長政	近江 仁正寺	3回	1万8000					美濃	長勝(信長・秀吉に仕え美濃今尾城主、元和2越後3条)→長政(元和6近江転封)
13 伊東祐慶	日向 飫肥	3回	5万7000				○	日向	祐兵(秀吉に属し天正16飫肥へ慶長5没)→祐慶(関ヶ原で徳川に通じ安堵)
14 稲葉一通	豊後 臼杵	3回	5万					美濃	一鉄次男の貞通(天正18郡上八幡城、慶長5臼杵)→典通彦六(慶長6相統)
15 稲葉紀通	丹波福知山(2・3期)	2期・3期	4万5700			○典通	○典通	美濃	重通(美濃清水城主、信長に仕える)→通重・道重→紀通(慶長12相統、徳川に属す)
16 遠藤慶隆	美濃郡上八幡	3回	2万6700	○	○		○	美濃	郡上八幡城主(天正15転封のあと慶長5に八幡城にもどる。寛永9没)
17 大村純信	肥前 大村	3回	2万7970					肥前	嘉前(天正15秀吉に属す→純頼→純信(元和5年相統))
18 織田長則	美濃 野村	3回	1万					尾張	織田信秀11男系、織田有楽系統
19 織田信周	丹波 柏原	3回	3万6000					尾張	織田信秀4男系
20 片桐孝利	大和 竜田	3回	4万1000				×	近江	浅井田臣。且元(秀吉家臣)→孝利(元和元年道領相統)
21 加藤忠広	肥後 熊本	1期・2期	51万5000	○清正		○清正	○	尾張	清正は秀吉子嗣、賤が岳七本槍。天正15熊本城主、慶長16死去→忠広へ
22 加藤泰興	伊予 大洲	3回	6万				○貞泰	尾張	光泰(伊勢加藤氏の末流、斉藤氏滅亡後秀吉に属す。元和3年米子から大洲へ)→泰興
23 加藤嘉明	伊予 松山	1期・2期	20万	○	○	○	○	三河	賤が岳七本槍の一人。文祿4から伊予へ。慶長8松山築城、寛永4年2月会津転封
24 亀井茲政	石見 津和野	1期のみ	4万3000					石見	尼子田臣、絶家後復活、茲矩(秀吉に属し因幡に領地)→政矩(慶長17相統、元和3津和野)→茲政(元和5相統)
25 木下延俊	豊後 日出	3回	3万	○		○		尾張	北政所の生家。足守藩祖家定の三男、日出藩祖。慶長6日出築城
26 京極高広	丹後 宮津	3回(1期高知)	7万8200	○高知			○高知	近江	秀吉の取立てで台頭。高吉→高知(次男)→高広
27 京極高三	丹後 田辺	3回	3万5000					近江	高知→高三(高知の次男)
28 京極忠高	若狹 小浜	3回	11万3268	○高次		○	○	近江	近江半国守護家、秀吉の取立、小浜藩初代、高吉→高次(長男)→忠高
29 来島通春	豊後 森	3回	1万4000					伊予	河野氏末流、秀吉に仕え伊予に領地。通総→長親(家康に属し慶長6森へ)→通春(慶長17相統)
30 黒田忠之	筑前 福岡	3回(1期長政)	50万	○長政		○長政	○長政	播磨	孝高(姫路、秀吉の軍師として活躍し豊前に領地)→長政(関ヶ原筑前転封、元和9没)→元和9年忠之相統
31 桑山一直	大和 新庄	2期・3期	1万3000					尾張	重晴(秀吉・秀長に仕え但馬竹田、和歌山など)→重→一晴(慶長6大和に転封)→一直(慶長9相統)
32 桑山貞晴	大和 御所	3回(1期元晴)	2万6400					尾張	重晴→元晴(次男、慶長6大和で1万石)→貞晴(元和6相統)
33 小出吉親	丹波 園部	3回	3万					尾張	吉政次男(元和5年、兄吉英と別れ園部に移る)
34 小出吉英	但馬 出石	3回	5万	○吉政(岸和田)			○	尾張	吉政(文祿4但馬出石6万石、慶長9岸和田)→吉英(慶長9出石安堵、慶長18父没後岸和田、元和5再び出石へ)
35 嶋津忠興	日向 佐土原	3回	3万	○以久	○		○	薩摩	以久(慶長8佐土原拝領)→忠興相統(慶長15相統、大坂出陣)
36 杉原長房	但馬 豊岡	3回	2万7438					尾張	家次(秀吉に仕え京都所司代)→長房(秀吉に仕え天正17豊後杵築のち但馬)
37 立花機次	筑後 三池	3回	1万					筑前	直次(宗茂弟、天正15秀吉に属し筑後三池。西軍につき領地没収)→機次(元和3相統、元和7旧領三池郡)
38 立花宗茂	筑後 柳川	3回	10万9510					豊後	宗茂(天正15秀吉に属し柳川13万石、西軍に属し改易、陸奥棚倉へ。元和6年11月柳川復帰)→忠茂
39 伊達秀宗	伊予 宇和島	3回	10万					陸奥	伊達政宗の長男、証人として江戸。大坂陣出役のあと伊予宇和島拝領
40 田中忠政	筑後 柳川	1期のみ	32万5000	○吉政			○	近江	吉政(秀吉に仕え岡崎城主、関ヶ原のあと柳川へ)→吉次→忠政(慶長14相統するが内紛おきる、元和6没無嗣断絶)
41 寺沢広高	肥前 唐津	3回	12万4300	○			○	尾張	広正(信長に属す)→広高(秀吉に仕え唐津6万石、関ヶ原で12万石に)
42 藤堂高虎	伊勢 津	3回	32万	○			○	近江	浅井田臣、秀長・秀吉に仕え伊予宇和島7万石、関ヶ原以後家康の信任得て慶長13伊勢22万石
43 戸川正安	備中 庭瀬	3回(1・2期達安)	2万2500					備前	宇喜多田臣、達安は関ヶ原の功で備中で3万石、寛永4年没、正安へ
44 徳永昌重	美濃 高須	2期のみ	5万3773					近江	寿昌→昌重
45 中川久盛	豊後 岡	3回	7万0480	○			○	山城	茨木城主→播磨三木→文祿3豊後へ
46 鍋崎勝茂	肥前 佐賀	3回	35万7036	○	○	○	○	肥前	龍造寺の重臣から、慶長12家督譲与
47 峰重賢忠英	阿波 徳島	3回	25万7000	○至鎮		○至鎮	○至鎮	尾張	正勝→家政(天正13阿波へ)→至鎮→忠英
48 土方雄氏	伊勢 鳥羽	3回	1万2000					尾張	雄久(織田信雄に仕え大山城主、のち秀吉に属す)→雄氏
49 一柳直盛	伊勢 神戸	3回	5万				○	美濃	直盛(美濃黒田城主、慶長6伊勢神戸)→直重→直興(金沢配流)
50 平岡頼資	美濃 徳野	3回	1万					摂津	頼勝(渡り奉公人、小早川の裏切策し備前小島に領地、慶長9年家康から美濃に)→頼資(慶長12相統)
51 古田重恒	石見 浜田	3回(1期重治)	5万4780	○重勝(松坂)	○重治(松坂)		○重治	美濃	重勝(秀吉に仕え文祿4伊勢松坂、慶長11没)→重治→重恒(元和9相統)
52 細川忠利	豊前 小倉	3回(1期忠興)	39万9000	○忠興		○忠興	○忠興	山城	藤孝(幽齋、青龍寺城主)→忠興(三寶)→忠之(元和7相統)
53 堀尾忠晴	出雲 松江	3回	18万6000	○吉晴			○	尾張	忠氏→忠晴、天正14近江佐和山→天正18浜松12万石→慶長5出雲畠田城24万石
54 本多政武	大和 高取	3回	5万					三河	徳川譜代の本多一族の末流
55 前田利常	加賀 金沢	3回	119万	○	○	○	×	尾張	利家(天正9能登、天正11金沢城主→利長→利常(慶長10家督))
56 松倉重政	肥前 島原	3回	4万					大和	大和五条→伊賀→肥前へ
57 松平忠直	越前 福井	1期のみ	67万					三河	結城秀康一忠直(家康の孫)
58 松浦隆信	肥前 平戸	3回	6万3200				○	肥前	隆信→鎮信→隆信
59 毛利秀就	長門 萩	3回	36万9400	○	○	○	○	安芸	安芸吉田から広島へ。元就→輝元→秀就
60 毛利高政	豊後 佐伯	3回	1万8000		○	○	○	尾張	信長家臣、本能寺変後毛利家入贅、秀吉に仕え文祿4年豊後日田2万石、慶長8佐伯へ。高次→高政
61 森忠政	美作 津山	3回	18万6500	○			○	美濃	長可→忠政、
62 山内忠義	土佐 高知	1期のみ	20万2600			○	○	尾張	掛川から慶長6土佐へ。一豊→忠義(弟康豊の長男、慶長10相統)
63 山崎家治	備中 成羽	3回	3万					近江	秀吉に仕えて摂津三田城主、慶長5年因幡、元和3成羽へ
64 分部光信	近江 大溝	3回	2万		○			伊勢	光嘉(文祿4から秀吉家臣、慶長2上野城主)→光信(慶長6相統、家康に認められる。元和5近江大溝へ)

(注) 大坂城再築公儀普請に出役した64の大名を対象に出自居城・知行高などを掲げる。出役状況は3期とも出場場合は3回と記した。出身地は織豊政権に始めて登用された人物の出生地を基準にした。知行高は寛永5年(大坂御普請之御帳：蜂須賀家文書)の役高を基本としたが、1期のみは元和3年知行高(藤井2010)や地口・丁場割図などに依拠した。

表 2 64大名の居所・出身分類

居城所在地	大名数	出身国	大名数	出隅担当
尾張	0	尾張	23	7
伊勢・美濃	7	伊勢・美濃	9	2
九州	21	九州	9	1
近江	2	近江	8	4
中国	16	中国	5	3
大和	4	五畿内	4	1
三河	0	三河	4	2
四国	11	四国	1	0
北陸	3	陸奥	1	0
(合計)	64	(合計)	64	20

ていました。

さきほどから、いろんな方が触れた大坂城の公儀普請ですが、豊臣氏の大坂城が1615年の大坂の陣で焼けた後、徳川家の二代將軍秀忠によって再建・再築がなされます。この大坂城公儀普請は、元和6年つまり1620年から寛永5年(1628)までおよそ10年にわたり行われます。10年間に3回の大坂城再築の公儀普請が実施され、3回の普請にのべ64人の助役大名が参加します。各地の大名64人が大坂城作りに半ば強制的に動員され、今の大坂城が出来たのです。その64人について、彼らはどこに領地を持っているのか、どういう経歴を持っているのか、皆さんの手元の資料21ページに大変細かい表があります。

「大坂城再築普請64大名の居城・出身・履歴」というタイトルの表ですが、64人の大名を五十音順で並べています(表1)。元和6年の1期普請に動員された47大名、寛永元年・2年の2期普請に59大名、寛永5年の3期普請に出た55

表 3 大坂城再築普請で出隅を担当した20大名

助役大名	居城位置	出隅担当の担当箇所数	領知高(石)
1 前田利常	加賀 金沢	1期5つ、2期5つ、3期1つ	119万
2 松平忠直	越前 福井	1期2つ、1期のみ	67万
3 黒田長政・忠之	筑前 福岡	1期1つ、2期1つ、3期1つ	50万
4 加藤忠広	肥後 熊本	1期1つ・枳形、2期天守台	51万5000
5 細川忠興・忠利	豊前 小倉	1期1つ、2期1つ、3期1つ	39万9000
6 毛利秀就 ☆	長門 萩	1期1つ、2期1つ、3期1つ	36万9400
7 鍋嶋勝茂 ☆	肥前 佐賀	1期枳形、2期1つ、3期1つ	35万7000
8 田中忠政	筑後 柳川	1期のみ1つ	32万5000
9 藤堂高虎	伊勢 津	2期1つ、3期1つ	32万
10 池田光政	因幡 鳥取	1期2つ、2期1つ、3期1つ	32万
11 池田忠雄	備前 岡山	1期枳形、2期桜門、3期1つ	31万5000
12 蜂須賀忠英	阿波 徳島	2期1つ、3期1つ	25万7000
13 堀尾忠晴	出雲 松江	1期1つ、2期1つ	18万6000
14 有馬豊氏	丹波 福知山	3期1つ	20万9000
15 加藤嘉明	伊予 松山	1期1つ、2期1つ	20万
16 森忠政	美作 津山	1期1つ、2期1つ、3期1つ	18万6500
17 生駒正俊・高俊	讃岐 高松	1期1つ、2期1つ	17万1800
18 寺沢広高	肥前 唐津	2期1つ	12万4300
19 京極忠高	若狭 小浜	1期1つ、2期1つ	11万3268
20 片桐孝利	大和 竜田	1期1つ	4万1000

大名(57大名とすることもある)、これを全部合わせると150名以上になりますが、大半は同一大名が繰り返し動員されているので、のべ64大名となります。表1では寛永5年の3期普請に動員された大名を基準に大名の氏名を掲げていますが、64大名が元和から寛永にかけてどこの城下に居城を構えているのか「居城館」という欄に、それを示しました。また彼らは大坂城の3回の公儀普請、1期、2期、3期のうち全部に動員されたのか1回だけ、あるいは2回出たのかも区別して表示しました。3回とも出た大名が多数派(59人)ですが、「大坂城出役状況」の欄に「3回」と注記しました。1期だけ2期だけとか、いずれか2回という大名の場合は出た時期を注記しました。3回とも出た大名で代替わりがあったときは、新しい家督の名を注記しています。

また隅・角と言いますかね、石垣の目立つ出隅を担当したり、枳形門を担当した20人の大名については、表1では網掛けだけほどこし、別に20大名のリストを掲げました(表3)。この20大名リスト

に3回のうちどの期に、いくつ出隅を担当したか注記しました。たとえば一番上の前田利常は「1期5つ、2期5つ、3期1つ」とありますが、1期普請と2期普請でそれぞれ出隅石垣を5つ担当し、3期では1つ担当したという意味です。また「領知高」の欄は寛永5年の知行高を書いています。それから「公儀普請履歴」の欄では、大坂城に出役する前にですね、慶長11年に江戸城の公儀普請があり、続いて慶長12・13年に駿府城の公儀普請をやっていますし、慶長15年には尾張名古屋城の公儀普請があります。そして慶長19年にもかなり大規模な江戸城の普請があります。このように大坂城の公儀普請以前に行われた重要な城普請に、この64人はどの程度動員されているのかということを示すため、「公儀普請経歴」という欄にそれぞれマークしてあります。さらに「出身」という欄には彼らの先祖の本領地のあった国名を書きました。というのは、彼らの親や祖父の時代は織田信長や秀吉に仕えたという経歴を持っています。つまり織田・豊臣に仕えた先祖が、織田・豊臣に仕えたときの領地はどこにあったのか、彼らはどこにいたとき織田・豊臣の家来になったかということを出身欄に書いてみました。その後に、織田・豊臣政権に取り立てられた履歴もごく簡単に紹介してみました。とても盛りだくさんな表で細かくなりました。この表を丁寧にみることで一体大坂城を作った64人の大名というのはどういう人たちなのか、おおよそわかります。

まず元和・寛永段階、64人はどこに領知や城下町を持っていたのかといいますと、九州が21、中国地方が16、四国11です(表2)。圧倒的に西日本の大名が多いですね。北陸は3人で、前田が金沢で、松平忠直は越前福井、京極は若狭小浜です。北陸はほとんど3大名で支配していました。64人のうち75パーセントの大名が西国大名であると言ってよいと思います。これが「西高東低」といった理由です。しかし、彼らの出身地をみると、必ずしもそうでもない、ということがわかります。

軽く表面的にみて石垣作りは西国大名が担ったとってよいのですが、であるなら金沢城の前田家は、そういうなかでどういう石垣を造ったのだろうという関心をもって、滝川さんや北野さんの報告を聞いていましたが、お二人が指摘されたような特色が遺構の観察から出てきたわけであります。前田家は場所的には、先進的といわれる西日本とやや出遅れた東国の間である北陸にあって、どういう位置を占めるのか、そういうことを考えてみたいと思います。ところが、この前田氏の出身地は秀吉と同じ尾張国なんですね。前田利家は信長の家臣となって立身出世した方だから、よくご存知のことですね。

大坂城再築に動員された大名は、圧倒的に西国大名が多いと指摘しましたが、これを先祖の代といいますか、父や祖父の時代、織田・豊臣の家来になり始めた時期の出身、居住地を調べてみていくと、尾張・美濃・近江にいた大名が圧倒的に多くなります。出身国の欄で集計してみますと、大坂城再築

普請から30年ほど前の経歴というか領地を見たらですね、尾張出身が意外に多く前田家はじめ23の大名がいます。伊勢・美濃が9です。内訳は伊勢が1で美濃が8ですが、伊勢・美濃9、九州9、近江8、三河4という形で、簡単にいえば、尾張・美濃・近江が多いのです。尾張・美濃・近江というと、信長と秀吉が天下取りをするために、尾張から出発し美濃そして安土城のある近江へ出て京都に入るルートにあたります。つまり、決して西高東低ではないのです。

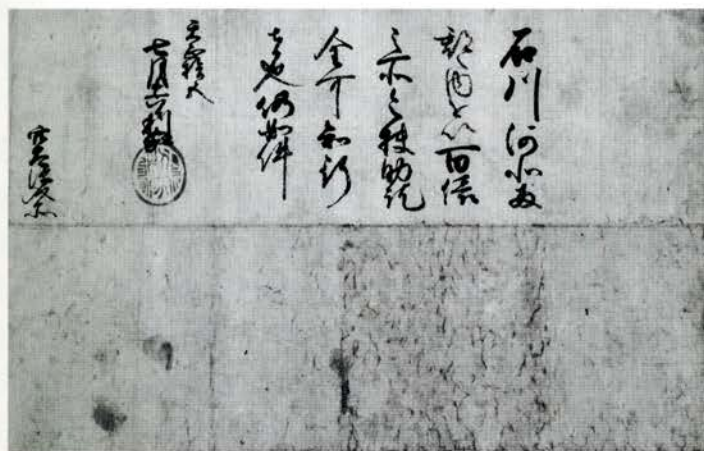


図1 天正15年前田利家知行宛行状(穴太源介あて)

中部地方といいますか濃尾から近江、畿内周辺、ここが石垣巧者といわれる西国大名たちの発生源だったといえます。「石垣技術は西高東低」と述べたことは不正確だとか真意を述べたいといったのは、この点に気付いていただきたかったからです。

織田・豊臣が取り立てた大名は、全国統一する過程で西国に領地を得て、濃尾平野あるいは畿内を出て行ったから西高東低になったのです。織田・豊臣の天下取りのルートに沿ったものたちが、西日本に進出していく。その結果、九州や西国に石垣作りに堪能な大名が多くいることになった、そういうことが言えるかと思います。ただし、もともと九州にいて豊臣に従属した大名も多く、彼らも大坂城の石垣作りで活躍します。九州・四国は石垣技術で独自の伝統を中世から継承していた可能性もありますが、この点は別の機会にしたいと思います。

ともあれ、近世の城郭と城下町づくりを主導したのは織豊大名、織田・豊臣の取り立ての大名であった。そこからですね、城下町のほうでも城郭の研究でも最近「織豊系城郭」という議論がなされています。そのバックにはですね、尾張・美濃・近江が織豊武士団の発祥地であるということがあります。秀吉が全国を平定する、天下統一をすることによって西国に織豊武士団を構成する家来たちは転封し領知を貰っていきます。尾張出身の前田家も北陸に百万石という領土を貰ってですね、まさしく織豊取立大名の雄として関が原の後もうまく生き残り、石垣の城を造っていくわけであります。その中で天正9年に入った能登の七尾城末期の遺構の中には、前田利家の作った石垣があるのではないかという指摘も最近なされています。もちろん初期金沢城の本丸東面にある文禄石垣も前田利家の作った代表的な石垣遺構であることは言うまでもないことであります。さらに前田家は織豊取立として穴太という石垣職人を天正15年に召し抱え、百俵の扶持を与えています。それが上の写真です。

この古文書(図1)は前田利家から穴太源介というものに100俵の知行を与えて、石垣職人として召し抱えた史料でございます。金沢市に今も子孫の方がいらっしゃいまして、原本を最近見せていただきました。この知行宛行状は全国の大名の中で、穴太という一介の石垣職人に米100俵、石高で言うと50石の知行を与えた事例として、最も古い例ではないかと思います。つまり、前田家は石垣作りに非常に関心のあった大名だといえます。天正15年段階から石垣職人に関心があったんですね。では金沢城内に天正期の石垣遺構はあるのかというと、今のところ確認されていません。さっき滝川さんの話でも、文禄の石垣から始まっています。これまでは見つかってはいないのですが、今後発見される可能性は高いと思っています。地中深く天正の石垣が隠れているはずだと、この古文書から私は確信しています。

□大坂城の出隅を担当した大名

さて、さきほどの64の大名が大坂城の再建に携わったわけですが、とくに20人の大名は、目立つ石垣つまり大坂城の出隅や枳形石垣を担当しています(表3)。この20人の経歴とくに慶長期における公儀普請の動員状況を見ますと、かなりの頻度で慶長期の江戸城・名古屋城の公儀普請に参加しています。例えば慶長11年、ちょうど江戸幕府ができた慶長8年から数えて3年目ですが、江戸市街の公儀普請に続き江戸城の造営が行われます。これを「ご一乱後の大国役」と呼んでいます、これに36の大名が出たと言われていますが、そのうち29大名が、81パーセントになりますが、大坂城の1期・2期・3期のいずれかに出ています。この36大名のうち7大名が大坂城に来ていないのですが、どんな大名が出ていないかというと、例えば元和6年の大坂城1期普請直前に改易となった福島正則が出ていません。紀州浅野家は取り潰しになった福島家のあと広島城に移っています。浅野家は紀州から広島へ移るんですが、なぜか大坂城に動員されていません。米子の中村家は秀吉子飼い大名ですが出ていません。東国の佐竹・保科・相馬といった大名も、江戸城には動員されましたが、大坂城には出ていません。

この背後には何か、江戸幕府なり的大名統制の考え方があるのだろうと思います。

さて出隅を担当した20大名の出身国を見ていきますと、尾張が7、近江が4、中国地方3ということで、やはり織豊政権のふるさとともいえるべき濃尾出身の大名がやはり多いと言えると思います。ですから「石垣技術は西高東低」と言いましたが、むしろ織豊政権が誕生した濃尾平野、尾張・美濃あるいは近江に、その淵源があるのかもしれないと思います。石垣技術は豊臣政権の成立過程と平行して発展していくと言ってもよいかもしれません。

慶長19年に行われた江戸城の石垣普請、これは大坂冬の陣の直前に動員されたものですが、江戸城の石垣作りのあと動員された大名はみな大坂城に出陣するため国元に一旦帰り、すぐ大坂に集結します。だから、この江戸城普請自体、政治的な意図というか匂いが濃厚なのですが、このとき動員された大名の85パーセントが大坂城にも動員されています。それから、慶長15年の名古屋城普請のときも、名古屋城に出役した西国大名20名のうち17名が大坂城にも動員されています。名古屋城というのは、家康が九男義直のため、家康自身が先頭になって自分の考えを前面に打ち出し城作りをしたといわれ、城下町もきちんとした碁盤目状に設計し、とても整然とした城下町づくりをするわけですが、この公儀普請に出た有力大名の多くは大坂城にも動員されたと言ってもよいと思います。家康の居城である駿府城の普請でもやはり、確認された21の西国大名のうち13名が大坂城に参加しています。

ところで大坂城の出隅を担当した20名というのを、出身国別に見ていきますと、前田、池田両家、池田家の本家と庶家の方ですが、寛永期で言いますと池田光政と池田忠雄です。加藤も二家みえますが肥後の加藤忠広と伊予松山城の加藤嘉明ですが、別の家です。蜂須賀・堀尾・寺沢、これらは秀吉の子飼の家臣ですね。近江では藤堂家、そして田中吉政・忠政とくる田中家、京極家・片桐家などです。この20大名は石高、知行高を見ると、ほとんどが十万石以上です。十万石以下は片桐家4万石だけです。4万石なのに隅角・出隅を担当しています。それから美濃では森忠政・生駒家、播磨の黒田家・有馬家、中国地方では毛利家が担当しています。毛利と鍋島に☆印を付けたのは、織豊取立ではなくて、彼らは旧族大名と分類されるからです。つまり戦国大名出身の有力大名ですね。戦国大名から近世大名に生き残った大名です。そういう毛利家・鍋島家も隅角を担当し織豊武士団出身の人たちと肩を並べ大坂城づくりに参画しています。

伊予の加藤家、加藤嘉明という人ですが、その出身をみると三河です。三河武士なわけですね。三河出身で文禄4年から伊予松山に移り、松山城で素晴らしい石垣を作りますが、大坂城の3期普請の直前に会津若松に移封となり3期普請は免除されます。それから越前の松平忠直ですが、この家に加わるというのは、ちょっと変わってますね。松平忠直以外全ていわゆる外様大名ですが、忠直は徳川一門の親藩大名です。徳川一門で唯一、この大坂城普請に動員されたわけですが、これは異色と言ってよいと思います。

こんなふうに見てくれば出隅・枡形の石垣を担当した20大名の7割は、尾張・美濃・近江出身でした。織豊大名として活躍し西日本に十万石以上の領知を貰った大名であるといえます。ところが越前の忠直の場合は、父は秀康といい家康の次男坊です。二代將軍の秀忠は三男です。忠直の父は二代將軍の兄だから甥にあたるわけですが、大坂城の北面石垣を担当します。前田家の担当丁場に隣接した場所で立派な石垣を作っているのです。大坂の陣で忠直は真田幸村の首を取ったといいますが、大坂の陣での果敢な軍功が正当に評価されないと感じ、鬱々とした日々を送って幕府に反感をもつようになったといいます。元和6年の大坂城普請の頃から、大名としてあるまじき変な行動が出始めます。江戸幕府に対し、叔父である秀忠に反発し、参勤を拒み、ようやく始めた参勤も途中でやめてしまうとかですね、側近家臣を次々と斬り殺し、正室を迎えた秀忠の娘とも関係が悪く八方ふさがりになり

ます。小説などに誇張して書かれた「殿のご乱心」が始まります。殿が異常な乱行で周囲が手を焼いている最中、越前松平家は太坂城1期普請に動員され、元和6年の石垣づくりに参加し、前田家の隣で立派な石垣を築いたのです。殿ご乱心、御家断絶の危機の最中と言いますか、家臣たちが困り果てている中でああいう仕事を成し遂げた松平家の家中の組織というのはどうだったのかと興味がわきます。藩主がそういう状態でよくやったと感じます。元和6年の1期普請が終わった後、秀忠は決断し忠直を改易し豊後国へ流刑にします。配流された後、彼は非常に穏やかになり豊後で長生きをしたといひます。

横道にそれましたが、この画像を見て下さい。前田家が3期普請で作った玉造口の枡形の脇にある出隅です。この辺で前田家が家中を8つくらいに分けて普請を進めたと北野さんが詳しく紹介していましたから、ここは略します。64大名の中で前田家はどのような位置を占めたのかという問題ですが、トップランナーとは言えないという指摘もありましたが、そういう面があると思います。しかし、他大名から遅れているわけではないことも事実であります。64大名のなかでは、平均以上というか並の技量は持って責務を果たしたものと思います。

それから諸大名が穴太という、当時先端をいく高石垣の技術をもった職人を抱えいく契機は、幕府の進める公儀普請を契機に召し抱える例が非常に多い。これまでも指摘されている点ですが今回も確認できました。さらに前田家が天正15年に、公儀の城ではなく居城普請のために穴太源介という穴太を召抱えました。さきほど天正15年の古文書で紹介した例です。それに続き豊後岡藩、竹田城の岡藩中川家が文禄3年に穴太の伊豆という者を召し抱えます。それまで中川家は播州三木にいたんですが、文禄3年に九州の豊後竹田に転封となり、岡城をつくる際に穴太の伊豆という者を太坂から招聘したのです。この穴太伊豆は、坂本出身の穴太と考えられますが、前田家の登用した穴太源介は純粋に坂本穴太と言えない面があります。彼の系譜を読むと源介は坂本で技術を学んだことは間違いないと思いますが、自ら丹波出身とか越前出身と言っております。源介は、越前府中で前田利長に仕えたあと加賀に来るのですが、加賀に来る前に太坂城の割普請、天正11年から秀吉が始めた太坂城の普請に協力したとも主張します。ですから、前田家が召し抱えた穴太源介は、金沢城のために雇ったんじゃないくて、秀吉の太坂城作りを意識して前田家として彼を抱えた可能性も高いわけです。そんな意味で穴太の召し抱えは、公儀普請、要するに秀吉とか徳川幕府のために召し抱えたという面が強いのかなと感じます。

□近世石垣技術の3つの段階

次にちょっと視点をえて、近世の石垣普請というものを少し大きな視野で論じたいと思います。ここまでは江戸前期に限定し石垣技術を担った大名と穴太の話をしてきましたが、このあとマクロな視点で近世300年間を通して石垣技術の歴史を鳥瞰したいと考えています。これまで石垣普請というのは、近世初頭のおよそ50年で石垣技術がどんどん発展し、そのあと17世紀後半からはだんだん衰え伝統の石垣技術は廃れていく、つまり近世前期は発展期、近世中期・後期は衰退していくという二段階で考えていたのではないかと思います。しかし、金沢城の石垣の変遷などを見ていると、そういう単純な二段階論ではよくないと思います。それでは金沢城石垣の多様性は説明できないと考えています。そこで一つの仮説として提案したいのですが、近世の石垣技術は、大きく三つの波があり、3段階で変遷したと考えたいと思います。

第Ⅰ期は石垣技術が草創され発展する時期で、織豊政権期から江戸初期、1580年から1650年頃ですね。第Ⅱ期は石垣建設が停滞すると言われている時代ですが、17世紀の後半から18世紀初頭にかけてです。寛文～元禄期という時期ですが、実はこの時期は完成された布積みが広まる、同時に切石積み

も広がり、より整然とした姿で整備されます。ただし新しい石垣デザインも登場します。そんな意味でむしろ、単なる停滞期ではなく新しい石垣様式も生まれる転換期であると考えています。第Ⅲ期は前田家の穴生役の後藤家の記録や技術史料からわかってきたことです。江戸後期は石垣を新たに作ることは、ほぼなくなります。日常の地道な石垣の保守・管理を通じて既にある石垣を、江戸時代初頭や前期の素晴らしい石垣技術に学び伝統を生かしながら、石垣を修理し保持するためいろいろ工夫を行う時期です。そういう中で個性ある石垣が作られていく。これを第3期の波とおいてはどうかと考えてみました。

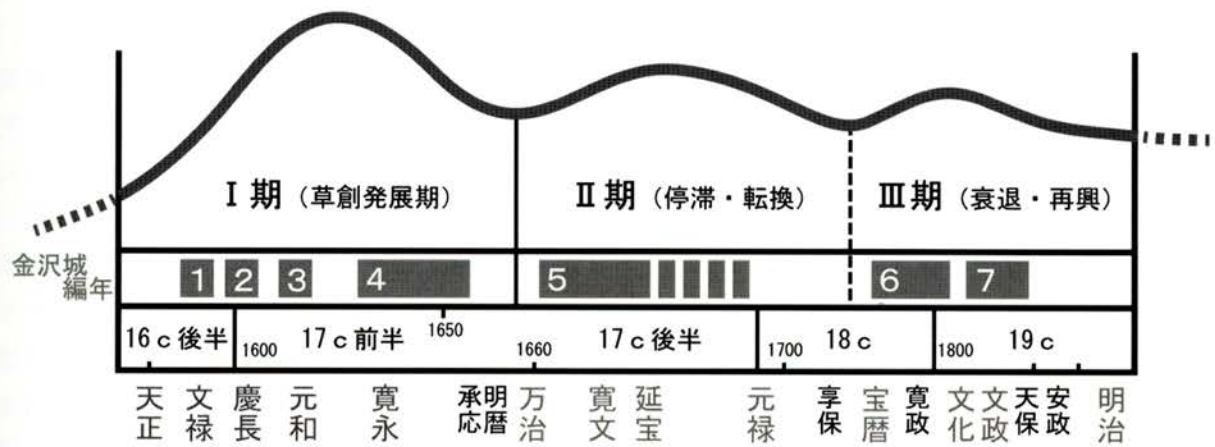


図2 石垣技術の三つの波

表4 石垣技術の3段階

I 期	石垣技術の草創・発展期	織豊期から江戸初期（1580年～1650年頃）
II 期	石垣建設の停滞期（金沢では転換期）	寛文～元禄期（17世紀後半）
III 期	日常管理によって既設石垣を保持した時期	江戸中後期（18世紀以後）

ざっくりとしたイメージはこの図2に示した通りです。第1の波があって、第2、第3の段階へと独自の展開をする。石垣普請の技術は、ただ単に時代とともに衰えるわけではなくて、新しい石工集団なり穴太たちが参画し、新しい石垣作りの波を作り出すということに光を当てていきたいと考えています。金沢城の石垣様式の変遷は七期に分けて理解されていますが、1期から4期ぐらいまでが、3つの波動のうち第一波になるかと思います。金沢城の5期石垣、5代藩主綱紀時代ですが、それはこの第二の波動になるかと思います。金沢城の5期石垣は、切石積み石垣が玉泉院丸跡の周辺で多様な様式をみせながら展開します。したがって、決してこれを停滞と言ってはならないかと思います。第Ⅲ期も衰退とは言いながらも、伝統的な良い技術は再興しようという動きがあります。だから停滞・衰退ではなくて「転換」であるとか、いいものの「再興」という見方をすべきではないかと考えております。

もう少し言葉を変えて補いたいと思います。第1段階（I期）はこれまで見てきたように大坂城・熊本城などで見られるように、石垣の高層化が急テンポで進み技術革新が著しい時期です。高石垣がどんどんつくられ、加藤清正・藤堂高虎といった城作りの達人が出てくる。大名の側近として、山内家では百々越前、加藤家の原田茂兵衛・飯田覚兵衛、藤堂家では渡辺勘兵衛、前田家では篠原一孝といった人たちが活躍した時代であり、穴太ももちろん活躍しますが、穴太の他に大名自身あるいは軍師と呼ばれる人たちが、つまり百々越前・原田茂兵衛みたいな人たちが、石垣の位置や高さ、15間の高石垣にすべきだとか、そういう基本原則はこの軍師と想定される人たちが決め、その枠内で穴太は施工し

たのではないかと思います。その意味で穴太は石垣普請の主役とはいえ重要な脇役、なくてはならない脇役といってよいと思います。現場の実務担当者として、大名・軍師の言うとおりに忠実に仕事すべきものだと思います。

第2の波動は、さきほどから石垣の規格化・平準化という指摘がありましたが、隅角の切石化と平石部での布積の普及に象徴される技術で特徴付けられます。その中で石材の規格化・平準化が徹底します。それは、石垣様式に新味が失せていく要因ともなりました。その一方で、寛文期、17世紀後半以降になると、新しい石垣作りはよほどのことがない限り出来ない。石垣普請は従来あった石垣の改修・修理が主となり、石を高く積み上げる技術は停滞します。ところがこの時期、金沢城では大変意匠性に富んだ石垣が登場します。

その特徴を簡単にいえば「切石積みの多様な展開」とまとめられると思います。とくに玉泉院丸跡の色紙短冊積みに象徴されるような石垣をつくったのは、藩主自身の趣向によるものなのか、アドバンスする文化人的なブレーンがいたのか、あるいは穴太自身の判断で施工したものなのか、こんなことが課題になると思います。これに対して第3の波、つまり18世紀の後半になりますと、損傷した石垣を修理することで穴太の技量は示されます。そして藩主や城主の関心は修理石垣に向けられなくなったと推測されます。むしろ、御殿の作事や内装の方に殿様の関心は移ってしまうのではないかと思います。だから、石垣修理は専門技術者である穴太任せになる面があったように感じます。それは『造営方日記』という文化年間の二ノ丸御殿再建記録や、後藤彦三郎の書いた著作などから窺われます。そういうなかで、坂本出身ではない石工、これを「非坂本穴太」と呼びたいと思いますが、全国各地にたくさん存在した、坂本出身ではない穴太・石工たちも石垣作りに参入してきます。さまざまな形で石垣づくりに参画し、石垣に限らず石塔や墓石など藩主のための石造品なら何でも加工し細工もする。藩所属の穴太の本務は、石垣作りに限定されると主張できなくなって、護岸工事や庭園作りなどいろいろな業務に従事します。

まとめておきますが、第1段階は大方針は大名・軍師が決め、施工段階で穴太は大名の指示に応じていく。第2段階は石垣技術が平準化する時代です。大名の役割は低下する一方で非坂本穴太、つまり各地の伝統的な石工が、石垣作りに広く参画し石垣は多様化します。さらに第3段階になると、藩主の関与は形式化する。その結果ですね、穴太の技術面での個性、石垣の遺構上に表れる個性は3期が最も出やすいのではないかと思います。

□大坂城の普請組織について

つぎに大坂城の話に移りたいと思います。お手元のパンフレットの17・18頁の内容についてですが、項目の1と2の順番を入れ替えて話を進めていきます。元和から寛永年間の大坂城再築は先程紹介した「三つの波」で言うと、第Ⅰ期の中頃というか後半くらいにあたりますが、草創・発展期の石垣技術がもっとも光り輝く時期だといえます。豊臣時代以来、発展を続けた高石垣の技術があるレベルに達したのが、徳川氏による大坂城再築普請ではないかと思います。同時にその頃、第2段階へ移行する芽生え、つまり石垣の新しい時代に向かう動向も、この第1段階の後半、元和から寛永期の大坂城公儀普請2期・3期頃から出てくる。それは具体的には、平石部での布積みとか隅角での切石化といった動きに象徴されます。第1波の頂点である寛永初期から始まって第2波の寛文期に、その動向はつながっていくのではないかと考えています。2期に向けた新たな胎動が起きた時期が徳川家による大坂城再築普請ではないかと考えております。そのことを、絵図・文献の史料からも実証したいと思っています。とくに石垣造営組織が著しく組織的なものとなり、そのことは石垣の均質化や切石積みを登場させることに関連しているのかもしれませんが、さらに、この草創・発展期が終わった時期から第

2段階前半の寛文・延宝期に、石垣技術書というものが各地に登場します。寛文・延宝期になると、第1段階で高石垣建造を指導し活躍した坂本穴太たちは、自分たちの技術を弟子や子孫のために書き残そうとします。そのような技術書が表れると、それを媒介に石垣技術が全国に伝わっていきます。そこで、大坂城再築普請の歴史的な位置ですが、石垣技術の3つの波の最初の波のピークであり転換の始まりであるとまとめていいと思います。

その中で、北野さんの話にもありましたが、大名組の編成、あるいは一大名の中ではその内部にまた家臣団をいくつかの班に編成するなど組織化が進む。さらに、そのことが、石材や石垣の均質化をもたらしました。それまでは、石材を高く積み上げる技術ということでひた走ってきた石垣技術でしたが、切石積の技術も加え多面的な様相を見せ始めます。また坂本出身でない穴太たちも台頭してきます。この「非坂本穴太」の台頭ということを象徴する石垣職人は、金沢城で何度も紹介している後藤文庫で知られる穴生方の後藤家です。この穴生方後藤家は、元和8年つまり大坂城再築の1期普請が始まった元和6年の2年後にようやく前田家直臣となっています。この前田家の石垣職人の代表というべき後藤家は、坂本の出身ではありません。播州三木の出身です。このような「非坂本穴太」である後藤家が前田家に召し抱えられ重用される所が、石垣技術の第2の波の時期の特徴です。I期の後半からそうした動きが出始めるのでしょう。

江戸城の石垣作りに活躍した石工として、相模小田原の板橋村にいた青木家があります。青木家は戦国大名の後北条氏に仕えた由緒ある石垣職人ですが、彼が徳川家の江戸城の石垣づくり、特に切石積み、石垣や雁木石の工事に参画したという記録があります。青木家が豪快な高石垣を作ったという記録はなく、伊豆などの石切丁場や切石に関わる石工事に限って青木家は召し使われたように思います。後藤家や青木家に代表される「非坂本穴太」は、このように元和・寛永頃くらいから城石垣作りに参画します。

大坂城再築を担当した64人の大名の1期普請、2期普請、3期普請での丁場割については、北野さんの講演で詳しく紹介されたので、私の方は簡単にしたいと思います。時間も迫ってきましたので、若干端折って進めたいと思います。北野さんがおっしゃったように、大坂城再築の大名組については、1期普請では二ノ丸の西・北・東の外堀で石垣を作ります。図版（北野報告図1参照）の通り、赤色の田中忠政組は二つに分かれ。肥後の加藤家が率いる組は三ヶ所とか四ヶ所に分かれます。前田組だけは、大名数が少ないこともあり一箇所にとまっていますが、それ以外の大名組の丁場配置はばらばらです。第2期普請でも、黒田組は四ヶ所に散らばっています。細川組も三ヶ所に分かれています。つまり大名組は編成したけれども、所属する大名の担当丁場そのものが大名組単位にとまっていないというのが1期および2期普請の特徴でした。ところが3期になると大名組ごとに丁場位置が整然とまとまてきます。

これと並行して普請組織が全体として組織的に運営されるようになります。慶長期の公儀普請は、動員大名に丁場での仕事をすべて丸投げするような面がありました。しかし、元和以後、大坂陣のあとになると、幕府が普請場の管理を強化します。それはまず、各大名が工事現場の陣頭にたって担当丁場で石垣作りを直接指揮することを禁止し、大名を普請場から排除するという動きから窺えます。それから大名組を編成したあと、普請経費の負担方法や技術協力などを大名組の中で相互に協力し調整することもみられました。大名家の内部では家臣団の普請組どうして協力したり利害を調整することもありました。このように、大名組のような割普請に伴って編成された作業分担のシステム全体を、幕府の直接指揮下におき、幕府の普請奉行や公儀穴太という技術リーダーの命令が直接大名組や大名配下の技術陣に速やかに届くようにしました。実務的な連絡事項や相談事が下までよく浸透するよう、

組織が整備されたようにみえます。その結果、大名抜きで動員された各藩の家老とか普請奉行・穴太などは、大名組ごとにヨコの連携をする可能性もあり、同時に幕府普請奉行や公儀穴太から最新技術の直接指導を受けるというメリットもあったように思います。時間がなくて、具体的な史料で解説することは省きますが、たいへん実務的な普請組織ができていたのではないかと思います。

あまり時間がないので、表5に掲げた、決算帳簿から再現した大坂城の割普請の全容は省略しなければならないのですが、64大名に課された工事種類を大きく分類すれば、石垣本体をつくる石垣工事、石垣の裏にある雁木石や天端の狭間石などを設置する石工事、そして堀を掘削するなどの土工事、以上の3つに分類できます。この石垣工事・石工事・土工事のうち、特に石垣工事は大名直営でやったことが確認できます。ところが一部の石工事や土工事は、どうも大名直営ではなくて、商人や日用頭に委託している部分が多いということが、史料から読み取れました。

さらに「献上石」なるものが、大坂城助役普請に動員されなかった大名から幕府にたくさん献上されます。この献上石は、幕府普請奉行から4つの大名組に配分されます。献上された石材は、各大名組の組頭大名に渡して、それぞれ希望するサイズの石材を順次受け取っています。それから、普請経費の決算も整然と行われていました。

この史料は、元和5年9月11日に幕府老中が連署で黒田長政に宛てた手紙の一節ですが、「急度申入候、仍従来年三月朔日、大坂御城石垣之御普請被仰付候、可被成其用意候」と指示しています。来年の3月1日から公儀普請が始まると述べた後で、「但し自身の御上は御無用に候、右の旨上意につき」、つまり大名自身が大坂に上がってくるのは無用である。それは將軍の意向であると言います。尚々書でも、「自身の御上りは無用」と念を押しています。さらに前田家の旧記「三壺聞書」の中で、元和6年の大坂御普請の時、諸国より奉行・役人が集まって、春より暮にかけ、国々より家老どもが来て「天下の御目付・奉行人へ対し思ひのまに相談を相きめ、御普請を致させければ諸事、はか行くこと限りなし」、つまり大名を抜きにして、幕府の普請奉行が本多や横山という家老衆や前田家の穴太に直接指示したことで「すべて順調にはかどった」なんて書いています。こういう記述から、大名を作業場から排除し、幕府直轄で組織化が進んだと言えらると思います。

こうした普請組織の充実ということが、石垣の均質化を進めた要因の一つだろうと推定しております。この辺は具体的な史料に沿って説明すればいいのですが、時間が過ぎていきますので省略しておきます。

表5 大坂城3期普請：割普請の対象となった土木工事の全容

(1)石垣工事（5種合計）：1万6551坪4分8厘（万石当たり41坪5厘）	
①本石垣（南曲輪南岸の高石垣）築坪：1万1331坪6分、	
地口間数506間3寸6分、石垣高さ15間1～4尺（反り高で	
17間1～4尺）、万石当たり28坪余	
②水敲石垣（南外堀南岸）3709坪8分（築坪5564坪7分÷1.5）	
③矢倉台7ヵ所：228坪26（築坪322坪39を本石垣坪に換算した値）	
④両仕切・両見附の築直：889坪56（築坪791坪94から換算した値）	
⑤所々の築込・裏石垣共：392坪26（築坪588坪39から換算した値）	
(2)石工事（6種合計）：地口合計6856間1尺（尺以下略） 4097坪57	
①狭間石	608間323
②雁木石	3930間52
③土留石垣	399間47
④水道工事	931間44（決算633間44）
⑤「青屋口水敲上ケ石垣」	364間10
⑥「青屋口水敲ノかつら石」	621間10（決算623間10）
(3)土工事（5種合計）：63万8844坪1分（⇒万石当り1587坪28）	
①本石垣の中根切・本根切	21万1071坪5分
②水敲石垣の中根切・本根切	12万3943坪
③御堀之土坪	12万8712坪
④下ケ地形ノ退土坪	10万5006坪
⑤所々ニ而前後ノ退土坪	7万0111坪6分

口黒田家丁場での組織的対応

北野さんの報告の中で、黒田家の二ノ丸大手門脇の丁場にふれていましたが、福岡藩の黒田長政の普請丁場は、従事する家臣団を野村大学組、桐山丹波組、黒田内膳組、黒田美作組という4つの組に編成していました。藩内でも割普請の体制をとっているわけです。この黒田家の4つの普請組のうち、加藤肥後守丁場との境目を担当したのは野村大学組でしたが、この野村大学組丁場は、大変ややこしい問題に巻き込まれ苦労したという事実がわかりました。北野さんもちょっと紹介されていましたが、これを史料に即し、もう少し具体的に紹介したいと思います。

実はこの野村丁場は、何かの理由で根石を置く基盤が6尺ほど低くなっていました。そこで野村大学は根石を配置するときに、隣の桐山組丁場と肥後加藤家丁場の間に挟まれたところですが、深い落ち込みがあるから、深さ5尺7寸の落ち込みがあるので根石を2段積み足さないと両脇と同じレベルの根石ラインにならないことがわかりました。おそらく、この落ち込みというか、凹んだ箇所は、豊臣時代の古い石垣の入り隅があった所であって、東西方向に石垣を築いていたためできた凹みではないかと思われます。徳川が計画した南北の畧線に直交し豊臣時代の石垣ラインが東西に走っていたものと想定されます。古い石垣畧線に付設した根石を丸ごと剥がしたので、こういう深い凹みができた可能性があるからです。その凹みに2段の石垣根石を積み上げるため、合わせて52の石つまり26石一列の根石を2段付け足さないといけなかったのです。そのため追加費用が必要となり、その請求書が残ったのです。その追加の請求書の内容を読んでいきますと、いま説明したような凹みがあって52の根石

を追加したことがわかりました。この凹みを上から見た図と立面図がこの画像です(図3・4)。この凹みに2段の根石を置き、背後の3間8寸に栗石を充填させています。さらに前面でも3間5尺2寸の幅で栗石を充填させたことがわかりました。根石の前面と背面に栗石をこれだけ入れたことが文献からわかったのは希有のことです。発掘事例はあるようですが、類例の少ないことなので注目される事実だと思い、あえて時間をとって紹介しました。

このような凹みが幅10間以上にわたって存在した野村大学組の丁場では根石設置が遅れました。この根石の追加にあたり、じつは幕府の普請奉行や公儀穴太などが見分に来て、いろいろな指示を出していることも、この追加の請求書に載っています。金額に付された注記の部分ですが、幕府奉行や幕府の石垣職人が現地で黒田家の穴太や奉行らと、追加の根石設置について、前後に栗石を施工することも含め、どう対処するのか方針を相談し、幕府の普請奉行として方針を出したように思います。そこに黒田長政という大名の顔は全く見えません。実務者同士の話し合いや相談によって幕府は対応しています。まさしく、組織的対応と

1 期普請黒田長政家臣野村大学丁場略図

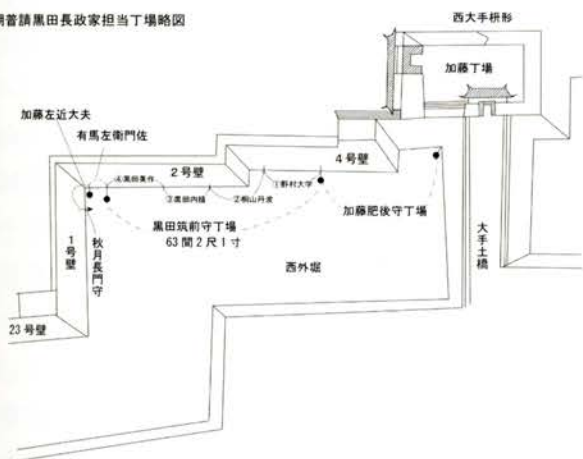
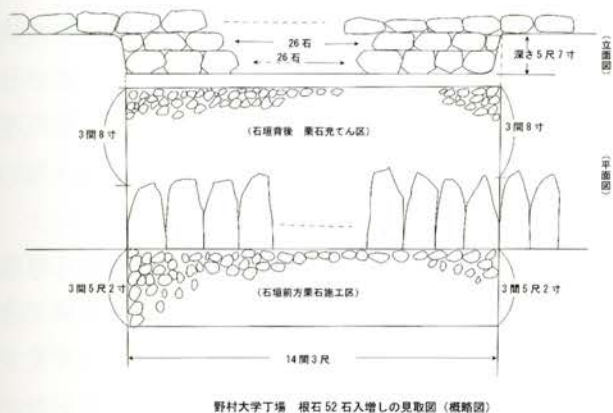


図3 大坂城1期黒田長政家臣野村大学丁場の位置



野村大学丁場 根石52石入増しの見取図(概略図)

図4 野村大学丁場の概況

というのは、このような実態だったのではないかと推定しています。公儀普請というのは、あくまでも徳川の城作りであり、徳川の流儀でやるということに徹する、だから助役大名は手伝いの人材、職人や人足を出すだけで、施工管理は幕府が担当するというのは当然です。これは、とても現代的な発想です。施主が施工管理の全権をもつようになってきたのが元和以降の公儀普請だと思います。元和の大坂陣以前、慶長期の公儀普請では、必ずしも幕府の施工管理は徹底しておらず、石垣巧者といわれる藤堂高虎や黒田長政、加藤清正など西国武将の手腕に依存しており、彼ら任せの部分が多かったのではないかと思います。

□大坂城の普請丁場割図

もう時間オーバーしましたが、大坂の普請丁場割図について簡単に触れておきます。慶長15年の名古屋城公儀普請の丁場割図は6点ぐらい、3種類6点あるとされていますが、大坂城の丁場割図は非常に多く、これまでの調査で16点の丁場割図が全国に残っていました。もっと探せばほかにも出てくると思いますが、これまで閲覧できた16点について、大きく甲類図と乙類図という二種類に分けてみました。甲類図というのは、徳川家が大坂城を再築するにあたり計画図として準備したもの、もしくはその写本と考えています。大坂城の再築1期、2期、3期それぞれの普請を始める前後につくられたものです。だから、実際に仕上がった石垣遺構と違う箇所が多々あります。施工された遺構と計画段階の図面が異なるということは、どこでも起きています。甲類図は計画図ですから、現存の遺構と一致しないことがあると考えて下さい。

これに対して乙類図は、3期に分けて行われた大坂城普請の全部の担当丁場が書いてあります。担当した大名の名ごとに、「地口」つまり担当した石垣底部の長さを、元和の1期普請から寛永5年の3期普請まですべて書いています。のべでいえば300件以上になろうかと思います（報告書に図示して掲げる）。したがって、この乙類図は大坂城再築普請が全部終わらないと書けない絵図でした。ですから、乙類図は寛永5年の工事竣工以後に、幕府のほうで編纂したものだと推測しています。成立時期は場合によっては17世紀の後半か18世紀初頭まで下るのかもしれませんが。享保年間に、幕府にも慶長～寛永期の公儀普請関係の記録や文書がないから、関係した各大名に関係書類や絵図がないか探してほしいと依頼しています。

この乙類図は、乙A類と乙B類の2つに分類できまして、A類のほうがB類より精度がよく、より信頼の高い史料をもとに作成されたということもわかりました。乙A類の代表は、大阪府立図書館にありますが大正年間の写本です。その写本の原本は国会図書館に所蔵される「大阪御城之図」という絵図です。それが乙A類のなかで一番古いということも、今回の調査で再確認しました。その国会図書館の丁場割絵図をよく調べたところ、豊後の岡藩の「由学館」という藩校が持っていたものだとわかりました。岡藩の藩校に旧蔵された絵図が、何かの事情で明治9年に文部省に寄贈され、その後国会図書館に移管されたということが、絵図に捺された蔵書印の考察から確認できました。ですから、この国会図書館の丁場割図は、岡藩中川家が入手した由緒ある絵図だということなので、近世の写本であることは間違いありません。これに対しB類図はたくさんあり、前田家でも写本がいくつか残っていますが、ちょっと精度が落ちます。

さて、甲類図は甲類1期図・2期図・3期図と分けていますが、その中で甲3期図は非常に面白いものでした。5点あるのですが、福岡県の春日市奴国の丘歴史資料館が所蔵する佐藤家文書の中にあったものです。甲3期図の5点とも寛永5年の3期普請の直前もしくは普請中に作られたものですが、1つは寛永3年の年記があるので、2年前から図面を作成し3期普請の準備をしていたことがわかりました。この佐藤5図という絵図（寛永5年「堀之図（大坂城二の丸南曲輪）」）は、寛永5年に行われた二

ノ丸南面石垣工事のうち、「本根切」という作業の前につくられた縄張図であることが確認できました。二の丸の南外堀を豊臣時代の堀よりも広くして掘り上げたとき、作業指示を行うため事前に掘削土量などを積算するため作成されたものと推測されます。石垣の天端ラインや根石ラインが引かれています。石垣はゆるやかな斜面をつくりますから、天端ラインと根石ラインはある幅をもった平行線で描かれます。

石垣工事の当初に実施される「根切」という工程は、天端ラインと根石ラインを示した縄筋を決め、それを基準に底土を掘削し、石垣の根石を据える土台工事にあたります。その際大量の土を除去します。このような根切の計画図として寛永5年に作成された、この佐藤5図は大変貴重なものです。たぶん類例がないものと思います。石垣技術書に書かれた「なで縄」は天端ラインのことを意味しますが、これと根石縄のライン、そして、その外側に根切を行うラインも描かれます。天端、根石、根切りという3本の縄筋の線を描いたうえで、それらを26の工区に分けています。それぞれの坪数を合計すると1万9881坪になりますが、これを3期普請の担当大名55人に割り振ったのです。割普請を分担するための基礎的な調査は幕府の方で行い、こういうデータをもとに、55大名にそれぞれ1万石あたり20坪とか、1万石あたり1000坪というふうに担当する土工事の分担高を割り振っていったわけですね。非常に組織的にやったことがわかります。

これは佐藤6図（寛永5年頃「大坂城二の丸南曲輪丁場割図」）ですが、堀底を掘り上げたときの土坪を積算した絵図です。土坪の合計は4万4000坪余りでしたが、これもやっぱり19の工区に分けて工事面積も付記しています。また、さきほど紹介した3期普請の決算帳簿からもいろんなことがわかりました（ここで紹介した甲類図・乙類図は報告書『城郭石垣の技術と組織』に掲載）。

一つはですね、石垣工事・石工事・土工事という工事種類ごとに経費などがきちんと書き分けられていた点が注目されます。石垣工事の5種類は、①本石垣つまり最も目立つ二ノ丸南面の高石垣、②堀の反対側にある水敵石垣、さらには③仕切石垣のほか④土留石垣、⑤その他石垣など5種類に分類されていました。3期普請の石垣工事の対象面積は全部で1万6551坪と見込んでいましたが、これを助役大名55人の総知行高400万石で割ると、1万石あたり41坪という数字が出ます。これが石垣工事を負担する大名の基本的な負担基準です。石工事はですね、雁木石・狭間石の設置あるいは水路の石工事などですが、これも何か換算基準を設けて1本化したうえで1万石当たり負担坪数を算出しています。

土工事の5種類は、本根切・中根切などですがこれも5種類に分けていますが、工事種類ごとの手間や経費に差異がないので、5種類合わせて63万坪の土工事と積み上げたうえで、5種類総合で1万石あたり1587坪という賦課基準数を計算しています。このように全工事量を積算したうえで、55大名全体の普請役高（知行高に一定係数をかけたもの）を出し万石当たりの賦課坪数が定まると、この基準数に各大名の知行高（役高）を掛けて、各大名の工事担当面積や石垣幅や長さが決まります。そこで、こうした事情を詳細に記した「蜂須賀家文書」の「大坂普請之帳」という9冊の帳面を読み解いてみました。その結果は省略せざるを得ません。3月に刊行される報告書のほうでご確認下さい。

□新たな石垣意匠の登場と非坂本穴太

大坂城の公儀普請を担当した丁場ごとに石垣のデザインが、大名ごとに違う、時期によって変化があると言われております。金沢城石垣の変遷は7期にわたって変化していきますが、そうした多様性を生み出す背景については、近世初頭に出現した石垣技術をいち早く摂取したことが一つの要因といえます。また北野さんも言われましたが、公儀普請を通して、さまざまな技術を受け入れた、ということもあると思います。その際、坂本穴太から非坂本穴太への技術伝播もあったと想定されます。

さらに17世紀の後半には新たな石垣意匠が登場するので、そのようなチャレンジもあったといえま

す。18、19世紀になると、「非坂本穴太」つまり近江穴太と関係のない、それぞれの地域の地元石工や穴生たち、加賀でいえば宝暦年間に穴生に取り立てられた扶持人石工出身の正木甚左衛門、元和8年以後利常が取り立てた後藤家のような新興の穴太たちが新しい技術を持ち込み、自己主張しはじめます。これまでの伝統技術に学び、自己の技量を磨きながらも新たな要素も果敢に取り入れ、あるいは一旦衰退した石垣技術を再興するという動きもみせる。これらの動向がそれに該当します。

石垣に特徴や個性を与える要因として、将軍・大名・軍師の築城思想が大きな要因といえますし、技術者としての穴太の技量・見識も影響を与える要素だと思います。さらに、石材の性質、労働力の調達事情、財政事情も影響を与えていると思います。

全国各地に散在する非坂本穴生や石工たちにはどんな人物がいるのか、具体的に紹介したいと思います。相模石工の青木家のほかに、萩藩で活躍した一宝家が知られています。一宝家は和泉国日根郡出身で、「箱作郷」という和泉の石工集団の一員だったと主張しています。一宝家は萩城普請に参画したと主張しています。和歌山藩に川上家という穴生家があり、元和頃は甚内と呼ばれる石垣職人でした。江戸後期になると石工を廃業しますが、そのとき、別の家にあえて石垣技術を伝えます。

17世紀中葉から後半に石垣技術書が登場したということは、坂本穴太から非坂本穴太や全国の石工集団に、特定の技術が伝えられていく契機になったといえます。そのためこの諸藩穴太リスト(図5)を用意しました。いくつかの石垣技術書もこのリストに紹介しましたが、全国各地に多様な石工集団や「穴太」「穴生」を自称する職人たちが活躍するようになります。前田家の穴太も大変多様であったことも申し添えておきます。前田家所属の穴生家でいえば、穴太家・後藤家・正木家いずれも非坂本穴太です。これらはパンフレット8「加賀藩の穴太」や『よみがえる金沢城』2巻に載っておりますので、詳しくはそちらをご確認下さい。

最後に17世紀の後半、5代綱紀の時代に独特の切石積みが展開する、と言われておりますが。これを石垣らしからぬ「異色の石垣」と評価することもあります。むしろ、そこに新しい石垣職人たちの台頭、地方石工の台頭という時代の変化のうねり、つまり石垣技術の第2の波がきたのだと感じてみてはどうでしょうか。その中で、玉泉院丸の色紙短冊積みや遊びの精神に満ちた切石積石垣などがつくられたのではないかと思います。活躍した後藤家三代の権兵衛という人はですね、寛文5年頃から活躍を始めてですね、綱紀公の露地方御用に応えた逸話があります。権兵衛は本務の石垣御用だけでなく、露地づくりにも精通した謡も得意で、人持衆数名に指南をした。綱紀公に召し出されて、露地御用に精勤したため、たびたび拝領物があつたという逸話をもつ人物です。このようなタイプの穴太は、江戸初期の穴太とはかなり相貌が違っているのではないかと思います。

まとめをしたいと思います。加賀藩の穴太の多様性はですね、全国の動向の縮図と言えらると思いますし、寛永期から活躍した後藤家の台頭は、坂本以外の穴太の先駆者と言っていいのではないかと思います。それから、石垣技術の三段階については繰り返しません。3つの段階を経て石垣技術が変化するとともに、担い手も彼らの考え方も変わっていくということを指摘したかったのです。本当の試案ですが、提案してみました。どうも、大きく時間をオーバーし失礼しました。これで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

図5 諸藩に仕えた穴太リスト

所属藩	大名家	主な穴太の名前（召抱時期）	築城に従事した城郭等
熊本藩	細川家	戸波儀大夫300石（駿河次男、1624年召抱）、戸波儀兵衛（17世紀後半）など。野口小次右衛門によって「石垣秘伝之書」執筆	大坂城・江戸城・小倉城・熊本城など
福岡藩	黒田家	戸波六大夫、戸波次郎左衛門・次郎兵衛300石（慶長以後）、穴生小川長右衛門（1610年）、戸波吉五郎・弥五大夫（18世紀）、戸波次郎左衛門（19世紀）	福岡城 名古屋城など
久留米藩	有馬家	穴生清右衛門（1637年）、戸波六大夫（1680年頃）	久留米城
柳川藩	立花家	戸波文左衛門200石（1637～81年）、戸波久左衛門200石（17世紀後半）	大坂城、江戸城など
徳島藩	蜂須賀家	坂本平左衛門（1601年～）300石、2代市左衛門（1631～59年）と7代坂本熊太（19世紀前半）は戸波駿河の娘婿。	大坂城、江戸城など
長州藩	毛利家	一宝藤右衛門とその子孫。片山嘉兵衛忠之家（寛文11年、石切役から穴生役に昇進、以後幕末まで無給穴生を継職）	萩城、新田（御開作）・塩田石垣や築港石積などに従事
和歌山藩	浅野家	大坂陣留守組：穴生河内（160石）、穴生備中（160石）	和歌山城、慶長公儀普請
紀州藩	徳川家	元和5年：吉左衛門（穴太丹後・70石）、甚内（川上家・60石）、作兵衛（15石）、長助（20石）、文化7年：川上伝兵衛（30石）、津村吉郎右衛門（20石）	和歌山城、寛永公儀普請
土佐藩	山内家	北川豊後（1601年～）	浦戸城、高知城など
岡山藩	池田家	堀兼寛大夫（1624年～）堀兼又右衛門（1642年～）	大坂城、姫路城、岡山城
津山藩	森家	公儀石垣師の子、戸波平左衛門	津山城
広島藩	浅野家	穴太河内160石、穴太備中150石、穴太甚五（元和年間）	江戸城・大坂城
岡藩	中川家	大坂より穴太伊豆（1594年）招く	岡城
越前藩	松平家	石垣師堀兼佐次右衛門300石（1686年）	福井城
松江藩	京極家	穴生勘助200石、穴生美濃125石（寛永年間）	松江城
岩国藩	吉川家	錦帯橋の建設にあたった湯浅安右衛門英道、坂本穴太の戸波駿河から石垣技術を学び「石塙書」を伝授された。	錦帯橋修築